

主論文の要約

論文題目 英語学習における活用的学習観の機能と形成過程

氏名 赤松 大輔

急速な国際化に伴い英語を用いたコミュニケーションの必要性が高まるなか、今日の学校教育場面では、学び得た知識を実際の生活場面へと活用できる人材の育成が求められている。本論文では、日本人英語学習者の効果的な学習の達成のために、学習観という心理的概念に着目し、学習方略や英語授業における授業活動といった変数との関連の検討を中心とした一連の研究を行い、英語の活用を重視する学習観の機能と形成過程について論じた。

第1章の第1節では、学習に対する信念の理論的背景について整理した。学習観は「学習成立および効果的な学習に対して学習者がもつ信念」と定義される。学習に対する信念をさす心理的概念には他に認識的信念や学習の概念があり、これらの概念も紹介したうえで学習観の概念的特徴について論じた。第2節では、学習に対する信念に関する実証的研究を概観した。先行研究には、主に信念の発達の変化や学習のやり方をさす学習方略との関連を検討したものが多くみられる。それらの研究を通して、学習に対する信念は、効果的な学習方略の使用を介して学習成果を向上させること、および学習に対する信念は学習者個人の学習経験によって形成されることが示されている。また、教科学習の枠組みにおける信念の機能や形成過程の検討も増加しており、教科によって信念の様相や学習行動への影響が異なることが指摘されている。さらに、教科の特徴を反映した信念を含めた検討を行うことで、数学や理科をはじめとした教科学習における学習観の機能や規定因を検討し、教科教育の実践に即した知見が見いだされている。第3節では、これまでの研究の問題点について論じた。先行研究の問題点として、英語学習の特徴を反映した信念を取り上げることの重要性、および信念の規定因に関する実証的検討の不足を指摘した。学習に対する信念に関する研究では、特定教科の枠組みにおける検討の重要性が指摘されている反面、外国語学習に対する学習観を取り上げたものはあまりみられない。外国語教育研究においては、外国語学習の性質を反映した言語学習観に関する研究がなされ、外国語学習を単語や文法事項の暗記や母国語の翻訳作業と捉える「伝統的外国語学習観」をもつ学習者は、効果的な学習方略を使用しにくいことが示されている。しかし、外国語として英語を学ぶわが国のような学習環境を踏まえ、実生活での英語使用を重視するような学習観について取り上げた研究はみられず、そのような学習観をもつ学習者がどのように学習を行い、学習成果を挙げているかについて検討されていない。また、学習に対する信念の規定因として個人の学習経験があることや信念と学習方略使用の間の相互的な規定関係が存在することも示唆されているが、それを実証的に検討した研究知見が不足しているということも先行研究の問題点として指摘した。

第2章では、英語学習観を測定する尺度を作成した。探索的因子分析の結果、英語学習を単語や文法を覚えることと捉えるような、従来の外国語教育研究における伝統的外国語学習観と想定できる因子が抽出され、「伝統志向」と命名した。加えて、実際に声を出して発音することやネイティブの音声を聴くことなど、実践的に英語を使用することを重視する項目からなる因子が新たに抽出され、「活用志向」と命名した。この2因子構造は高校生・大学生いずれのサンプルにおいても確認され、一定の妥当性があることが示された。

第3章では、活用志向の機能に関して、学習方略との関連に着目して検討した。研究2では、活用志向と学習方略の使用、学業成績の関連を検討した。共分散構造分析の結果、学業成績や学業成績と関連の強い学習方略に対して、従来の研究で想定されてきた一般的な学習性質を反映した英語学習観（学習量志向・方略志向）と比較して、活用志向の影響力が相対的に大きいことが明らかになった。研究3では、活用志向と動機づけ調整方略の使用、学習行動の関連を検討した。共分散構造分析の結果、活用志向は自律的調整方略を介して学習行動を促進し、伝統志向は成績重視方略を介して学習行動を抑制することが明らかになった。以上の結果から、活用志向には、認知的側面および動機づけ側面の双方において効果的な学習方略の使用を促進し、学習成果を高める機能があることが示唆された。

第4章では、学習方略使用との相互の影響性に着目し、英語学習観の規定因を検討した。研究4では、活用志向の規定因の検討に先立ち、学習全般に対する学習観として方略志向を取り上げ、学習方略使用との相互的な因果関係について検討した。交差遅延効果モデルによる分析の結果、方略志向が学習方略使用に影響を与えるという先行研究で想定されてきた関係性に加えて、学習方略使用が方略志向に影響を与えるという関係性が示された。研究5では、英語学習観として伝統志向と活用志向を取り上げて、研究4で示されたような学習方略使用との相互的な規定関係について検討した。その結果、学習観と学習方略使用との相互的な規定関係は、英語学習においても示された。特に、伝統志向は反復作業方略と、活用志向は深い処理方略と音声記憶方略と相互的な関連にあることが示された。また、学習方略使用は、学習方略に対する有効性の認識の程度をさす有効性の認知を介して英語学習観に影響することが示された。以上の結果から、学習方略の使用は有効性の認知に媒介されることによって英語学習観に結びつき、特に活用志向は、深い処理方略と音声記憶方略の使用および有効性の認知によって形成されることが示唆された。さらに、学習方略の使用経験によって形成された学習観は、後の学習方略使用を予測しており、英語学習観と学習方略使用の相互的な規定関係が示された。

第5章では、活用志向を形成する授業要因について検討した。研究6では、英語授業における相互作用的な授業活動の認知が活用志向に与える影響を検討した。また、その効果が学習者の個人差要因によって変化するかどうかについて、一般的英語学習観（学習量志向・方略志向・環境志向）および有能感に着目して検討した。重回帰分析の結果、大学の英語授業における相互作用的な授業活動の認知は大学入学後の活用志向と正の関連を示し、相互的な授業活動の認知が活用志向の形成に寄与する可能性が示された。さらに、相互作用的な授業活動の認知と学習者の個人差変数（一般的学習観および有能感）との交互作用も示された。

具体的には、相互作用的な授業活動の認知が活用志向を促進する効果は、大学入学時の方略志向の高い学習者、環境志向の高い学習者、有能感の低い学習者において生じることが示された。ここから、相互作用的な授業活動の場を設定するとともに、学習者が方略重視になるような支援を行うことで、活用志向を効果的に高められる可能性が示唆された。また、相互作用的な授業活動は、大学入学時に英語学習に対する自信のもてない学習者にとって有効であることも示唆された。

最後に、第6章では、本論文全体における総合的な考察を行った。第1節では、本論文で得られた知見の整理を行った。第2節では、本論文の理論的意義および教育実践的意義について論じた。実践的な英語使用ができる学習者の育成の重要性が高まるなか、そのような学習者がどのように学習成果を挙げているか、あるいはそのような学習者がどのように育成されるのかについては、十分に検討されていなかった。本論文では、学習観という心理的概念に着目し、英語の活用を重視する学習観を活用志向として想定し、その機能と規定因を実証した点で先進的である。活用志向の機能として、認知的側面・動機づけ側面に関わる学習方略を取り上げ、活用志向の高い学習者が、効果的な学習方略を用いることにより学校教育における学習成果を挙げていることを実証した点で意義深い。また活用志向の規定因として、学習方略使用と有効性の認知に着目することで、学習方略を使用して、その有効性を繰り返し実感することで活用志向が形成されるという一連の過程を示した。従来の研究では、教科学習に対する信念を取り上げる必要性が示唆されていたものの、英語学習の特徴を反映した信念に関して検討が十分でなかった。また、信念の規定因として学習者個人の学習経験が指摘されながら、学習経験による信念形成の過程を実証されるには至っていなかった。本論文の知見は、これらの先行研究の課題を実証的に検討したという点で理論的意義を有するものといえる。さらに、本論文では、個人内の要因にとどまらず、授業要因として英語授業における相互作用的な授業活動を取り上げ、その効果を実証した。この知見は、活用志向をもつ学習者を育成するために、授業活動といった学習者外の要因に介入を行うことが可能であること示したという点において教育実践に資する成果といえる。さらに、相互作用的な授業活動の効果を高めるために、学習者のより一般的な学習観や有能感に着目する必要性を示したことは、活用志向の形成のために多角的なアプローチが可能になるという点で意義深いといえよう。第3節では、本論文の課題と今後の展望について論じた。本論文の課題として、研究法が質問紙調査に限られていた点が挙げられる。そのため、実験を通してより統制された条件のもと活用志向の機能や形成過程を検討したり、本論文で示された授業活動の効果を踏まえた実践的介入を試みたりするなど、多角的な検討を行うことで活用志向の機能や形成過程を精緻に捉える必要があると考えられる。また、本論文では、活用志向の機能や規定因について、学習場面に関わる変数との関連しか検討していない。英語の実践的使用を重視するという活用志向の概念的特徴を踏まえると、活用志向は学習場面に限らない多様な英語使用とかかわっている可能性が考えられる。このような学習の枠組みを超えた活用志向の機能や形成過程についても検討を重ねていく必要があるといえる。